

THE MODERN WORLD-SYSTEM IV

近代世界システム

中道自由主義の勝利 1789-1914

IV

I.ウォーラーstein *Immanuel Wallerstein*【著】

川北 稔 *Minoru Kawakita* 【訳】



Centrist Liberalism Triumphant,
1789-1914

凡例

りのバリケード]。
[国民の春]を念
クィーンのカール
は、反乱の民衆
まわらなかつた
り提供。

世界システムの構成要素となる「ペリフェリ」は、過去の三巻の拙訳では、「辺境」としてきたが、「周辺」という訳語のほうが一般的になっているので、本巻では、「周辺」を採用する。「半辺境」も「半周辺」とする。なお今回新たに再刊行される第一―三巻も同様に修正されている。

また、本巻の中心課題のひとつである英語の「nationalism」は、一九世紀末までの、ヨーロッパでのそれを「国民主義」と訳し、二〇世紀の、とくにアジアやアフリカ、ラテンアメリカなどのそれは、「民族主義」とないし「ナショナリズム」と表記を分けるのが、習慣となっている。二度の「百年戦争」で培われた英仏のそれやフランス革命とナポレオン支配への反発から生じた前者に対して、列強の植民地支配に抗して生まれた後者では、性格に差があることをよく示す工夫である。しかし、このような訳し分けは、「近代世界システムのなかでの地位の上昇をめざす動き」という、この言葉がもつ一貫性が表現できないので、本訳書では、「ナショナリズム」で統一する。また、フランスの極右派(III)は、フランス語の発音にしたがって、「ウルトラ」とされている場合もあるが、耳慣れた「日本語」として「ウルトラ」を採用した。

この巻でも、一―三巻の例にならって、小見出しをつけた(▼の見出し)。原著にはないが読者の便宜を考へてのことである。

目次

凡例 ii

序章 『近代世界システム』全巻の構成 1

『近代世界システム』における本巻の位置 2 / 第一巻の構成 4 / 第二巻と「ヘゲモニー国家」の概念 5 / 第三巻——イギリスのヘゲモニーへ 6 / 第四巻 7

第1章 イデオロギーとしての中道自由主義 9

フランス革命と保守主義 10 / 自由主義とは何か 12 / ギゾーとペンタム 14 / 社会主義 17 / 「変化の常態化」への三つの対応 17 / 歴史の主役は誰か 20 / 三つのイデオロギーと国家 20 / 自由主義と社会主義の同盟 22 / 保守主義の自由主義への接近 24 / 唯一のイデオロギーとしての自由主義 25

第2章 自由主義国家の建設 31

——一八二五年から一八三〇年まで——

英仏抗争の終結——自由主義国家モデルの共有 32 / 主権在民というスローガン 33 / 秩序崩壊の危機感を共有した英仏 34 / 誰が国民なのか——労働者の排除 36 / フランスでも進んだ工業化 37 / イギリス——工業収益率の低下を補う海外投資益

りのバリエード]。国民の春」を念
イーンのカール
は、反乱の民衆
まわらなかつた
り提供。

40 / 大差のなかつた英仏の経済実績 42 / 「ヨーロッパ協同体制」 43 / イギリスのヘゲモニー確立に必要なだったフランスのリハビリー 45 / 労働運動の抑圧 47 / フランスにおける自由主義の確立 50 / ジオカルチャーとしての自由主義 52 / 海外での社会変革——自由主義者の立場 53 / ギリシアの独立運動 54 / ヨーロッパの起源はギリシアかエジプトか 57 / 自由主義による労働運動の抑圧 58 / 七月王政——自由主義国家の勝利 60 / ベルギーのフランスへの併合 61 / ポーランド反乱の意味 64 / イギリスにおけるカトリックの解放 65 / 一八三〇年になせイギリスに革命がなかつたのか 67 / 英仏などにおける中道自由主義国家の成立 69

第3章

自由主義国家と階級闘争

——一八三〇年から一八七五年まで——

中道自由主義国家の確立 98 / 英仏両国の労働運動 99 / 英仏友好協同体制の成立 102 / フランス国家の脆弱性 104 / ボナパルティスム——フランスとイタリア 106 / イギリスの対外干渉 107 / 殺物法の廃止 109 / レッセ・フェールという神話 110 / フランスの成熟 112 / イギリスの銀行論争とフランスの金融事情 115 / 改革をすすめるイギリス国家 116 / フランスの場合 118 / インターステイト・システムの作用 120 / 自由貿易帝国の形成 122 / 自由貿易の功罪 124 / フランスの自由主義と帝国——クリミア戦争の意味 126 / 英仏による世界支配の動揺——アメリカとドイツの台頭 128 / 労働者の市民への組み込み 129 / 「危険な階級」の台頭 132 / 自由主義の完成形としての保守主義 134

第4章

自由主義国家の市民

フランス革命と市民権の概念 176 / 包摂と排除——「市民」とは？ 177 / 受動的市民と能動的市民 178 / 女性の排除 181 / 黒人（解放奴隷）の排除 185 / 労働者の排除 186 / 社会的統合と二項対立概念の存続 188 / 一八四八年の世界革命 189 / 排除を切り崩す——社会革命とナショナリズム 190 / 労働・社会運動 193 / 労働運動の起点 193 / アルジョワとプロレタリア 195 / 職人から労働者へ 197 / 急進主義（社会主義）の台頭 200 / イギリスの新組合主義 202 / 労働運動と社会主義政党 203 / フランスの場合——すべての道は改良主義へ 205 / 社会主義者の国政関与 207 / アメリカ——民族・国籍による労働者の排除 208 / 社会主義にとっての植民地問題 209 / 女性・フェミニスト運動 211 / プロレタリアの反フェミニズム 211 / 「ファミリ・ウェイジ」を拒否したフェミニストたち 213 / 社会主義政党とフェミニストたち——ドイツとフランスの場合 215 / イタリアその他の場合 217 / 反奴隷制運動と女性——イギリスの場合 219 / サン・シモン主義とフリーエ主義 220 / 一八四八年が生んだ成果 221 / 公共圏のジェンダー化 223 / 政治的フェミニスト——女性参政権運動 225 / 社会的フェミニストと優生学の対立 227 / 平和運動と女性 228 / 民族・人種運動 229 / 女性の権利と黒人の権利 229 / 保守化するフェミニズム 232 / 人種主義の強化 234 / 有機体としての国民——他者排除の装置 235 / 排除を正当化する科学 236

第5章

社会科学としての自由主義

激変する世界をどう認識するか——社会科学の成立 268 / 「二つの文化」の発明 269 / 近代世界システムの成立と知 270 / 社会科学の誕生 272 / 社会運動としての社会科学 274 / 英米における社会科学の運動 274 / 講壇社会主義——ドイツの場合 276 / 社会科学における専門化と価値中立性 277 / 価値からの自由——社会生物学から優生学へ 280 / 科学的歴史学の創出 282 / 歴史学の科学化——史料批判 282 / 中道自由主義国家にとっての歴史学の意味 283 / 法則定立的な学の創出 286 / 三位一体の社会科学 286 / 政治経済学から経済学へ 290

▼「近代世界システム」における本巻の位置

「近代世界システム」の第一巻は、一九七四年に刊行された。本書は、その第四巻にあたる。四巻全体では、近代世界システムの歴史的・構造的発展の分析になっている。各巻は、それぞれ独立の一書ともなっているものの、同時に、単一のより大きな著作の一部を構成するようにも仕組まれている。この姿勢は、著者にとつても、読者にとつても、いくつかがつかないな問題を引き起こす。そうした困難のなかには、当初、私が予想もしなかつたものもある。したがって、こうした問題に、私自身がどのようにアプローチしてきたかを、はじめに明らかにしておくことが、読者にとって有益ではないかと思う。それに、そうすれば、私の意図するところが、読者によりわかりやすくなるかとも考える。

各巻・各章には、それぞれにひとつのテーマがあり、したがって、それぞれの論点をもっている。他方、全巻を通じて、歴史的・通時的であると同時に、構造的・分析的・理論的な構成にもなっている。というのは、かねて、認識論を「歴史などの人文学にみられる」個性記述的な方法と「自然科学の前提とされた」法則定立的な方法に区分する、かつて大いに喧伝されたやり方は、時代遅れの誤謬であり、健全な分析を妨げると考えているからである。社会の現実とは、つねに、しかも必然的に、「現実とは、瞬間、瞬間に動いているという意味で」歴史的である。しかし、同時に、すべての社会的行動は、何らかの歴史的社会的システムのなかでとられるわけで、そのシステムからくるさま

のバリエーション]。国民の春」を念入りのカールト、反乱の民衆にわたらなかった提供。

さまざまな制約を受けざるをえないという意味で、構造的なものである。

とはいえ、人が空間的・時間的に広大な現実を描きだそうとすると、どうしても、いきなり何もかも全体を取りまどめて、同時に話すことはできないという、基本的な難問に行き当たる。じつさい、「長い一六世紀」(一四五〇—一六四〇年)における近代世界システムの成立から、その現状、さらには未来像に至るまでの過程は、その最たる例である。したがって、私としては、ともあれ、おおむね年代順に話をすすめ、近代世界システムの構造上の特徴のほうは、それがはじめて出現するか、はじめて重要性を帯びるようになった時点で説明することにした。主として「長い一六世紀」を扱っていた第一巻では、一九世紀になってはじめて明確になる構造上の問題など、扱わずによいと思つたのである。

同様に、主に一九世紀を扱うこの巻では、すでに第一巻で議論をし、あいだの期間に大きくは変わっていない構造上の問題について議論をするのは無意味だと思われる。ただ、たとえば、「工業化」という現象がいつ起こったのか、という問題についての私の見解は、他の多くの研究者のそれとは違うので、必ずしも読者が想定する箇所では、記述していかないかもしれない。私が、どうしてそのような選択をしたのかは、行論のなかで明らかにすべく努めてきた。

そこでまず、時代区分の問題から始めよう。第一巻の執筆にあたって、全体を四巻とすることを決め、それぞれの時期区分をなかつた。だから、第一巻でこの概念を説明することはありえなかつた。オランダは、近代世界システム上、最初のヘゲモニー国家であつたが、同時にそれは、最後のヘゲモニー国家では絶対にあつた。とすると、ヘゲモニーの概念は、イギリスがそれを掌握するところや、アメリカ合衆国がそれを確立するところで説明するのも、不適切であつた。この概念は、じつさい、一度議論すると、以後は既知のことからとして取り扱われ、必要なときには、あらためての論証抜きで参照される。理論そのものについての議論は、すでになされているからである。

各巻のクロノロジーもまた、その巻で扱っている年代の範囲内において、それぞれの内在的な論理にも従っている。第三巻には、その好例がみられる。全巻は、一八四〇年代で終わるはずになつてはいたが、「近代世界システムへの」組み込みを扱った第三章は、タイトルからして一八五〇年までを対象としているし、実際には、もっとあとの時期までを論じている。他方、南北アメリカの定住植民地の脱植民地化をめぐる第四章は、一七六三年から一八三三年までを対象とした。

この第四巻の読者に、以前の三巻をあらかじめ読んでくれるようにお願いすることも難しいので、これまでに説明してきた通時的・理論的な議論を、もう一度説明しておくのが有益かと思う。この巻だけでは、そこで論じるべき問題で、落ちていることがあると思う読者がいるかもしれないが、それは、以前の巻でかなり広範に議論しているということがありうる。たとえ

を与えた。第一巻では、「長い一六世紀」、つまり、一四五〇年から一六四〇年くらいまでにあたる時期をカヴァーすることにした。しかし、第二巻に及ぶとすぐに、自分の言いたいことが、一六四〇年に始まるわけではないことが分かつた。多かれ少なかれ、それは一六〇〇年頃に始まり、一七五〇年くらいまでは続く話になつた。そこで、こうした年代を、第二巻の副題に入れた。その結果、わざと一部重複させるような、長期の時代区分を採用するに至つた。この考え方は、三巻、四巻でも踏襲した。しかし、その結果、一九七四年に想定した全四巻のみで、現在までを論じるという計画は、達成できないことになつた。

時代区分をオーバーラップさせる方法は、私の分析にとつて、決定的なものとなつた。というのは、時代区分というものは、かなり恣意的なもので、現にいま扱っている問題についてのみ、正当化されるだけのものだからである。たとえば、第二巻の第二章で扱った世界経済のなかでのオランダのヘゲモニーの歴史は、一六〇〇年か、あるいはもっと以前から始まっているともいえるだろうが、一六四〇年で終わったということはありえないし、「長い一六世紀」の歴史の一部でもありえない。したがってそれは、一七世紀(というのも、だいたいのことだが)における「ヨーロッパ世界経済の凝集」[第二巻の副題]の物語にあつた第二巻に埋め込んだのである。

しかも、こうした時代区分は、構造にかかわる諸概念を、テキストのどこに挿入すべきかという問題をも引き起こした。少なくとも私の意見では、一六世紀にはヘゲモニー国家は存在し



ば、一九世紀を対象とする書物なら、たいていは、いわゆる産業革命なるものについて論じている。というより、かなり詳細な議論をしているはずであるのに、と思う読者もあろう。しかし、この点については、私の場合、第三巻第一章で扱ってしまったので、一九世紀のまったく別の話をしようとしているこの第四巻で、再論する必要は感じなかったのである。

さて、各巻それぞれの趣旨にあたるものに話を移そう。第一巻は、「長い一六世紀」をカヴァーするもので、近代世界システムと、そのいくつかの重要な制度の誕生の物語である。第二巻は、封建反動の話ではなく、一六〇〇年から一七五〇年に至る期間の「ヨーロッパ世界経済」の凝集の物語として語られる。世界経済を構成する各地の資本家たちが、全般的な成長の鈍化現象に、それぞれどのように対応したかを説明するものである。一七三〇年から一八四〇年代までを扱っている第三巻は、資本主義的世界経済の拡大局面の復活——経済的にも、地理的にも——を対象とした。第四巻、つまり本書では、一七八九年から一八七三年ないし一九一四年までを対象としたい。この巻は、(いささか遅い時点のことであるが)近代世界システムのジオカルチャー、言いかえれば、私のいう中道自由主義を中心として成立し、それに支配されてきたジオカルチャーの成立を論じる。

* 訳注 ウォーラー・ステインのいう世界システムは、現実には政治統合のない「世界経済」または政治的に統合された「世界帝国」の形態をと

る過程を分析し、その過程で一六世紀の絶対王政が果たした役割を分析した。第四章は、「世界経済」と「世界帝国」の違いを論じた。また、カール五世の世界帝国形成の野望が失敗したことを取り上げた。第五章は、生まれたばかりのこの世界経済の中核となった地域を観察し、この地域に強力な国家機構が確立された事情と、その過程で階級が果たした役割を分析した。周辺地域の分析にあてた第六章では、その地域の国家機構が、なぜ脆弱だったのかを分析した。そこではまた、この世界経済の内部にある周辺部と、外延部との違いについても論じた。ここでいう外延部とは、この資本主義的世界経済の基軸をなす分業体制の、なお外部に留まっていた地域のことである。

第一巻は、全巻にまたがる基本的な議論の位置づけを行い、以後の巻で叙述する具体的で、経験的な歴史の変遷の概略を説明し、概念化する作業にあてた。「長い一六世紀」のあいだはもとより、かなり後になっても、この資本主義的世界経済は、地球全体のほんの一部、つまり、本質的に西ヨーロッパと南北アメリカの一部を覆っているにすぎなかった。地球上の他の地域は、この歴史的・社会的システムには含まれておらず、したがって、このシステムのルールには制約されていなかったのである。

▼第二巻と「ヘゲモニー国家」の概念

第一巻に対しては、一般に、一八世紀の末までは、「近代的」とか、「資本主義的」とか見える要素はほとんどなかったのだ

のバリケード」。
「民の春」を念
「のカー
、反乱の民衆
わらなかつた
提供。

るが、「近代世界システム」は、前者のあたりであることで、他の世界システムと根本的に区別される。この世界システム「世界経済」は、西ヨーロッパを中核として成立したことから、「ヨーロッパ世界システム」とも「資本主義的世界システム」ともよばれる。

** 訳注 「ジオカルチャー」は、「ジオポリティクス(地政学)」に対応し、世界システム全域に広がる価値観のこと。七頁に、著者の定義がある。

▼第一巻の構成

理論的な枠組みについては、各巻で適宜検討してきた。第一巻では、第一章で、近代世界システムが、なぜ、どのようにして「近代への序曲」「中世という序曲」から成立したかを論じた。のちに、これでは不十分と思ったので、一九九二年に論文を発表して補った。第一巻でキイとなる章は、第二章であった。この章では、基本的な分業体制の概念の概略を説明した。この分業体制こそが中核、周辺、半周辺という世界経済を構成する各地域を生み出していくのであった。この最後の「半周辺」という概念は、ラウール・プレヴィシユ「アルゼンティンの経済学者、一九八六年没」が提唱した「中核・周辺」という区分に、私が付け加えたものである。このことが、近代世界システムが資本主義的世界システムとして立ち現れたことの証拠であること、また、当初、この資本主義は、農業分野において世界経済のそれぞれの構成地域で、それぞれ特有の労働管理体制が生まれて確立されたことをも、そこで主張した。

第三章は、近代世界システムのなかで、諸国家が生まれてく

はないか、という異論がある。しかし私は、一六世紀にこそ資本主義の端緒があったのだ、という学説にしたがって議論を進めた。むしろ、一七世紀に、重大な後退現象、世界経済にとつて、ごくふつうの「B局面」——景気の長期下降局面——がみられたと考える。なぜなら、「一七世紀の危機」にかんしては、膨大な文献が存在しているからである。これらの文献については、第二巻第一章への序で扱った。いわゆる「危機」は、この世界経済の後退などではなくて、正常な長期波動のB局面にすぎないというのが、私の主張である。それは、資本主義の発展が頓挫したことを意味するのではなく、それが進展したことを示しているのである。

* 訳注 コンドラチエフ循環のような長期の景気変動の下降局面を表すフランス人シミアンの用語。

第二章では、すでに示唆したように、オランダのヘゲモニーを論じ、なぜ、またどのようにして、特定の国が、当面のあいだヘゲモニー国家となるのかを説明した。第三章では、ヘゲモニーを握った強国が衰退し始めるときに、どんなことが起こるかを解明した。具体的には、後継のヘゲモニー国家になろうとするイギリスとフランスによる争いを扱っている。第三章はまた、周辺地域がB局面、つまり下降局面とどのように格闘したか、また、「内に向かう」傾向が反資本主義的にならず、「生き残り」競争の方向になったのはなぜかということも、分析した。第四章では、はじめて半周辺の性格について、本格的な議



のバリエード」。
「民の春」を念
—のカー
、反乱の民衆
わらなかつた
提供。

論をした。近代世界システムのなかで半周辺が果たした役割に
ついても論じた。「勃興していく」半周辺と「没落していく」
その別について論じた。オランダは、もはや重要な政治
的役割を果たさなくなったにもかかわらず、そのうち、英仏
間のヘゲモニー争いは続いたが、その問題は第六章で扱った。
この抗争では、イギリスが一日の長を示すことになるが、そう
した優位は、ふつういわれるように、イギリスの経済構造が少
し先進的であったからではなく、この優位はイギリスの国家機
構が、通説に反して、さまざまな理由から、フランスのそれよ
り強力であったことによるのだ、という点を確認した。

▼第三巻——イギリスのヘゲモニーへ

一八世紀末から一九世紀はじめにかけての時期は、かねて、
資本主義的世界経済の経済的・地理的拡大の時代であった、と
されてきた。この現象には、しばしば産業革命という名称が与
えられ、イギリスに生じたとされる、世界で「最初の産業革
命」についても語られてきた。しかし、分析的にいえば、この
概念は二つの理由で脆弱である。ひとつには、どの国にも孤
立したかたちでの、一国だけの「産業革命」はなかったし、あ
りえなかつたということである。いろいろな国で起こったのだ
とすれば、それは、全体としての資本主義的世界経済の現象そ
のものであったことになる。第二に、実際にこの期間に、機械
化と世界的に生産高の急上昇が起こったのだとしても、その上
昇はその前後の時期にもみられる、同様の急上昇とくらべて、

さして特異なことでもない。これが、第一章で示したことである。
第二章では、フランス革命史を取りあげた。この「出来事」
については、膨大な文献が書かれているので、とりあえず、長
年優位を占めてきた社会史的、つまり、古典的な解釈に従うも
のと、二〇世紀最後の三分の一に勢力をました自由主義的な、
つまり、修正派的な解釈のものに二分した。私見では、両者と
も、フランス国内の現象に視野が限定されていて、間違いであ
る。どちらか、フランスの国家機構や経済構造の変化にばかり
に気をとられているからである。この章の主張は、フランス革
命とは、英仏のヘゲモニー争いの最終局面の一部であり、ま
た、その結果でもあったということである。ヘゲモニー争い
は、いうまでもなく、イギリスの勝利となって終わった。した
がつて、フランス革命が国内にもたらした変化は、ふつう喧伝
されているよりはるかに小さいということも、主張した。

英仏のヘゲモニー争いがもたらした、ひとつの結果として、
資本主義的世界経済が、二度目の大規模な地理的拡大を経験し
たという事実がある。四つの地域、すなわち、ロシア、オスマ
ン帝国、インド亜大陸、および西アフリカが、かの「近代世界
システムという」枢軸的分業体制に組み込まれた。決定的に重
要なことは、これまで外延部にあつた世界が、資本主義的世界
経済に「周辺」として組み込まれると、どんなことが起こった
かということである。組み込み以前の既存の構造はそれぞれに
違っていたのに、組み込みによって、この四つの地域は、大な
り小なり、似通った構造をもたされることになった。

最後に第四章では、はじめて、公式の植民地の脱植民地化の
概念を扱った。なぜそんなことが起こったのか、なぜそれが新
たなヘゲモニー国家「イギリス」の出現と結びついていたのか
を論じたものである。しかし、「アメリカ—三植民地の独立やラ
テンアメリカ諸国の独立など」南北アメリカにおける脱植民地化
は、「入植者」のそれであつて、先住民の生活権の回復ではな
かつたことも、論証した。唯一の例外はハイチであつたが、そ
のハイチは、孤立させられ、破壊されてしまった。そのなりゆ
きと理由をも、ここで明らかにした。

▼第四巻

いよいよ、「長い一九世紀」の叙述をめざした本書、つまり
第四巻にさしかかると、二つの問題に直面した。時代がすすむ
につれて、近代世界システムの地理的範囲は拡大するので、そ
の分、読まなければならない材料も膨大なものとなる。しか
も、研究文献の数は、どこか特定の一国にかんしてさえ、少な
くとも算術級数的にはふえていく。というより、ほぼ、幾何級
数的にふえていく。このことだけでも、これらを読みこなし、
得た知識を総合するのに、とてつもない時間がかかる。これこ
そ、第四巻の刊行がこんなに遅くなったことの、いささか覚束
ない申し訳である。もうひとつ、ときが過ぎるにつれて、多く
の他の知識人の活動にふれて、執筆にあてる時間がなかなかと
れなかつたこともある。

二つ目の問題は、この巻の主題をどこにおくか、ということ

であつた。これまでの分析からすれば、主題は産業革命ではあ
りえない。産業革命が資本主義制度を生んだなどということ
ありえない。というのは、私見では、そんなことは、ずっと以
前に起こったことだからである。フランス革命や南北アメリカ
の諸革命のような、いわゆる大民主主義革命を主題にするわけ
にもいかない。というのは、どちらの革命も、従来いわれてい
るようなものとはまったく違う、と考えてきたからである。そ
こで、ここでは、フランス革命が全体として近代世界システム
に与えた文化的影響を、この巻のキイをなす主題としたいと思
う。それを私は、近代世界システムのジオカルチャーの産物と
みなしたい。つまり、この世界システムの全域でひろく受け入
れられ、以後の社会的行動を制約することになる一連の思想、
価値観、規範などのことである。

フランス革命は、政治変革の正当性と主権在民の概念を正当
化したものだ、と私がみなしていることは、いずれ明らかにな
るはずである。ペアをなすこの二つの信念は、さまざまな影響
をもたらしした。まず第一に、こうした二つの概念がひろく流布
したことの反動として、近代の三つのイデオロギーが生まれ
た。保守主義、自由主義、急進主義がそれである。中道自由主
義がほかの二つのイデオロギーを「飼ひ慣らし」、一九世紀が
進行するとともに、勝利していくというのが、本巻全体の議論
である。具体的には、ことは、イギリスやフランスのように、
自由主義国家の創設というかたちをとって進行する。また、こ
の過程は、主要なタイプの反システム運動の誕生を促進した

が、同時に、そのインパクトを一定の範囲内に抑える役割をも果たした。反システム運動の概念は、ここではじめて登場する。ここでは、市民権という概念によってもたらされた利点と、こうした利点の程度について抱かれがちな幻想とを扱う。最後に、この過程はまた、歴史的思考にもとづく社会科学の形成を推進したり、反対に抑制したりしながら進行する。時期的には、一七八九年から一九一四年まで、というより、より正確には、一七八九年から一八七三年ないし一九一四年までを扱うことになる。

とはいえ、やがて気がついたのだが、このような重点のおき方をする、本来ならこの巻で書くはずであったつぎの三つの物語は、第五巻に先送りせざるをえないことになった。すなわち、ひとつには、列強によるアフリカ分割と民族解放運動の勃興、第二に、ヘゲモニー国家としてのイギリスに代わる、アメリカ合衆国とドイツによる経済的・政治的ヘゲモニー争い、その結果としてのアメリカのヘゲモニーの確立、最後に、「近代世界システム、つまり、資本主義的世界経済への」東アジアの組み込みと、その周辺化、および二〇世紀末以来のその再興の物語とが、それである。

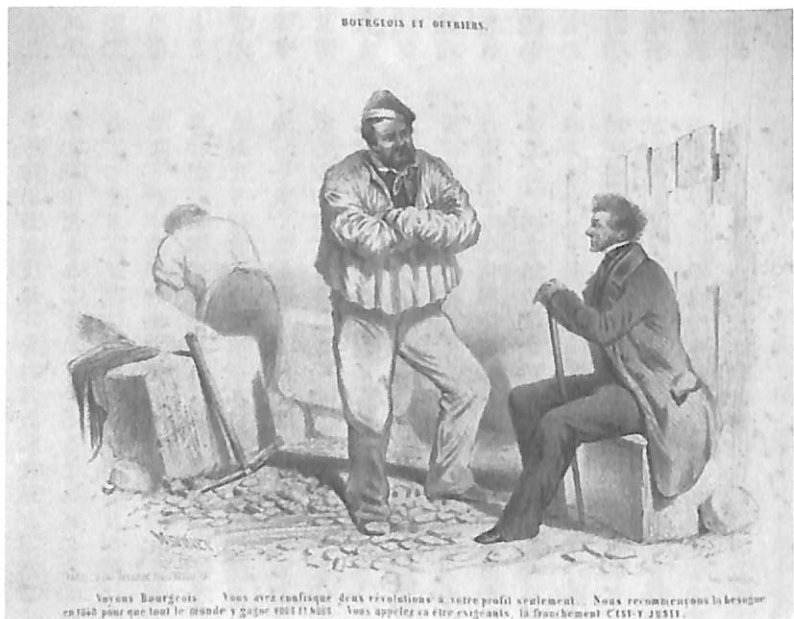
この三つの歴史は、いずれも一九世紀中頃のどこかにその源をもっているが、一九一四年頃に終わったかのように語るのには、どうみても合理的とはいえない。一九世紀の歴史は、すべから二〇世紀につながっている。一九一四年という年は、こ

のバリケード」。
[民の春]を念
一のカール
、反乱の民衆
わらなかつた
提供。

れら三つの物語のいずれにとつても、それ自体としては、転換点というわけではない。三つの物語のそれぞれの主要な部分は、勃興と衰退ないし衰退と勃興の激変のなかにあった。とまれ、私としては、これらの物語はいずれも、「長い二〇世紀」の物語であつて、つまり、イギリスの世紀の物語ではなく、アメリカの世紀の物語であつたと考える。したがって、読者諸賢には、とりあえず、寛容と忍耐をお願いしたい。

目下計画書——書いているうちに変わるかもしれないが——の第五巻は、一八七三年から一九六八年ないし八九年までを扱うことになる。さらに、やり遂げられればの話であるが、第六巻では、資本主義的世界経済の構造的危機が主題となり、一九四五年ないし一九六八年から、二一世紀中頃のどこか、たとえば、二〇五〇年くらいまでが対象となるだろう。私の考えでは、その頃には世界の状況はすっかり変わっているはずで、近代世界システムは決定的な終焉を迎え、代わりのシステムに譲位しているはずである。いまだ知られていない、知りようもない、この後継となるシステムは、単一であるのか、複数になるのかもわからないし、その特徴がどういふものになるのか、まだ素描する段階にもない。

(一) "The West, Capitalism, and the Modern World-System," *Review*, 15, No. 4 (Fall 1992), 561-619, reprinted in *China and Historical Capitalism: Genealogies of Sinological Knowledge*, ed. Timothy Brook and Gregory Blue (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1999), 10-56.



ヴィクトール・ドレーヴ作「ブルジョワと労働者」。この風刺画は、1848年5月、社会革命[二月革命]の真っ只中のフランスで描かれた。労働者は、ブルジョワにむかって、これまでの2つの革命(1789年のフランス革命と1830年の七月革命)では、革命の成果をおまえさんたちにかすめ取られた。だが、今度こそは、「わしら労働者は、正当な分け前を要求するぞ。それが正義というものだ」と主張している。フランス国立文書館提供。

第1章 イデオロギーとしての中道自由主義